

# 心の安らぐ温泉街をめざして



## ゆかたまつり

上山市・ゆかたの似合う  
まちづくり実行委員会

五十嵐 航一郎

上山市では今年から市を挙げて「ゆかたの似合うまちづくり」に取り組んだ。今、何故「ゆかた」なのか。この疑問に答えるため、温泉街の歩みを戦後から振り返ってみよう。

第二次大戦の敗戦は、日本の都市を壊滅状態に陥れた。復興にひと息ついた時、人々は安らぎの地として空襲の打撃を免れた田舎の温泉場に目を向けた。宿泊設備があり、食糧があり、何よりも疲れた心身を癒してくれる温泉があった。人々は温泉場に殺到し、保養地から歓楽街へと様変わりしていった。

次に温泉地を変えたのは、高度経済成長である。右肩上がりの経済は企業を成長させ、個人にも時間的、経済的余裕をもたらし、人々をレジャーへと駆りたてた。会社の慰安旅行に加え、招待旅行・接待旅行など、「自分の懐を痛めない旅行」が登場した。一方、道路交通網の整備も並行して進み、旅行も列車による個人の旅から貸切バスによる団体旅行へと主流が移った。そういった背景のもと、温泉街の旅館は大型化し、館内には売店から二次

会用の飲食コーナーが整備され、旅行者は館内から一步も外へ出ずに要求を満たせるようになった。その結果、温泉地に付随していた土産店や飲食店はさびれ、温泉街の情緒は失われてしまったのである。

さて、今やバブルがはじけてしばらく経ち、企業は生き残りに躍起となっている。社員旅行はもとより、招待、接待などの団体旅行は影を潜め、人々は「自分の懐で旅行せざるを得なくなった」のである。個人の家計も苦しく、旅行回数も減った。人々が数少ない旅行をいかに有意義なものにするかを考えた時、その形態は、パターン化した観光地巡りのあわただしい団体旅行から、憩いを求める個人の旅行へと様変わりをしていった。

このような情勢の変化のもと、旅館の現状は惨憺たるものである。各旅館、各温泉地は生き残りをかけてしのぎを削っているものの、特別の妙薬があるわけでもなし、出るはため息ばかりなりである。これが、旅館の歩んできた道であり、現状である。

さて、皆さんは「ゆかた」という言葉から何を連想されるだろうか。われわれ、上山の温泉地で育った者には、まずもって「温泉」が浮かんでくる。ところが、都会の友人に尋ねてみたところ、「夏・夕暮れ・夕涼み・夏祭り・盆踊り・ホテル狩り」という答えが返ってきた。これらが続けてみると「真夏の暑い時期、陽が落ちて涼しいそよ風が吹く夕暮れ時、ホテル狩りに出かけた時、笛や太鼓の祭り囃子に誘われて、盆踊りや鎮守の森の夏祭りに、カラン、コロンと下駄の音を響かせながら、うちわ片手に家族や友人とうち連れて出掛けて行く」という情景になる。都会では失われてしまったものへの憧れと郷愁が偲ばれ、その深奥には「心の安らぎ」"憩い"を求めていることがうかがい知れるのである。

「ゆかたの似合うまちづくり委員会」の事業は、単に「お客様を呼び込むために、ゆかたを景品として付ける」という発想ではない。物の豊富な時代に、ゆかたの景品ごとくで客を呼べるとは思わない。原点に返って見つめ

# Value Sight ゆかたまつり

ゆかた姿でくつろぐ人々



直すべきである。全国各地でホテルを呼び戻す活動が行われているが、それを考えたとき、「憩いのある住みよい町を作れば、自然にお客様も増える」という発想に至った。その一手段として、「憩いゆかた」のプレゼントが考え出されたのである。

では、どうしたら「ゆかたの似合うまち」を作れるのだろうか。上山市には湯町・新湯地区の「かみのやま温泉旅館組合」と、葉山地区の「かみのやま温泉葉山旅館組合」の二つの旅館組合がある。この構想は両組合の会合で発案されたものであったが、「まちづくり」という大きな課題は旅館だけでは解決できない。全市民に参画してもらう必要がある。そこで、市の観光課、観光協会、商工会に相談

したところ、快く賛同していただき、事務局も引き受けていただいた。また、宣伝誘客面からJR東日本と提携しようと、市長を先頭に東京本社に相談に行ったところ、全面的な協力を約束していただいた。

まちづくりには、ハードとソフトの両面があるが、旅館組合に潤沢な資金があるわけでもないし、市に財政的な援助を望むことも無理な現在、ハード面は極力抑え、できることから少しずつ整備することにした。なによりも必要なのは、商店や飲食店はもとより、一般市民の理解と協力である。

手始めに、市報を利用して市民のお客様への「声かけ運動」を呼びかけた。次に、お客様に気持ちよく旅館の外へ出てもらう方策について商店会や飲食店会などと話し合った。その結果、ゆかたを着たお客様や、新たに作った案内マップを持参したお客様には割引販売をしてもらうことにした。美容組合は無料でゆかたの着付けを申し出してくれた。いろいろなイベント・行事も検討された。「ゆかたスペシャルデー」を一週間設け、上山城を舞台に「ゆかたの似合うコンテスト」や「星の見えるコンサート」なども行った。その他、これまでもあった祭りや行事を積極的に活用し、お客様に外で楽しんでもらえる工夫を重ねた。

一方、ハード面では、葉山地区は数年前から門前の篝火や道路際に坪庭庭園灯を配置していたが、篝火のない湯町・新湯地区では旅館や商店の前に行灯を配置して情緒空間づくりに努めた。散策コースには各旅館・商店の軒先に縁台を設置して、散歩するお客様が気軽に休憩できるようにした。葉山地区では散策コース上にある廃止になった市営共同浴場

跡地を借り受け無料休憩所「ふれあい照テラス」を作り一般にも開放した。

われわれの呼びかけは徐々に市民の中に浸透し、「ゆかたデー」には市役所の職員をはじめ、各金融機関、商店、飲食店から病院の職員まで、ゆかたを着用していただき、法人会からは町づくりの一助にと資金の提供を受け、建設業界は暗い散歩道を少しでも明るくするようにと、壁掛け行灯を設置してくれた。

このように、「まちづくり」は市民一人ひとりの「自分たちの町は自分たちの手で」という気持ちを育てていくことと同時に、どのような町を作るのかという一つの目標を定め、それに向かって力を合わせていくことが大切である。机上の空論よりも「継続は力なり」を信じて、できることから一歩一歩進んでいくことこそ肝要である。

## 五十嵐 航一郎

ゆかたの似合うまちづくり実行委員会委員長。

かみのやま温泉葉山旅館組合組合長。

上山市葉山4の25。

昭和19年 山形市生まれ。中央大学商学部卒業。

昭和41年 葉山館へ勤務（家業手伝い）。

昭和48年 葉山館を株式会社に組織変更し代表取締役役に就任、現在に至る。

平成13年 上山温泉利用協同組合副理事長、

かみのやま温泉葉山旅館組合組合長、

ゆかたの似合うまちづくり実行委員会委員長。

平成14年 上山市商工会副会長、

上山市観光協会常任理事。